熊本県漁業と200カイリ問題

県漁業の現状

熊本県の海岸線延長は千百キロメートル（全国第六位）と長く、有明海や不知火海湾奥部には広大な干潟を形成するとともに、天草島周辺海域は島しょ、入江、内湾に富み、全国的にも優秀な漁場を有しています。

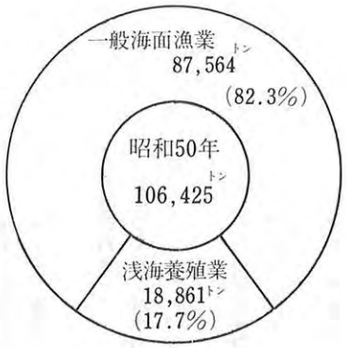
これらの漁場を生産の基盤とする漁業経営体は一万千八百十（全国第三位）を数え、そのうち沿岸漁業経営体は総数の九八・七パーセントを占めています。

経営体数に比べて生産量、生産額は全国二十位程度で、生産性の低さは否めませんが、貝類特にアサリ、ハマグリは全国一の生産をあげております。養殖においても中央の市況を左右するに至っている全国一の、クルマエビのほか、マダイ（三位）、ハマチ（十一位）、ノリ（六位）、ワカメ（十位）、真珠（四位）なども上位を占めています。

生産額

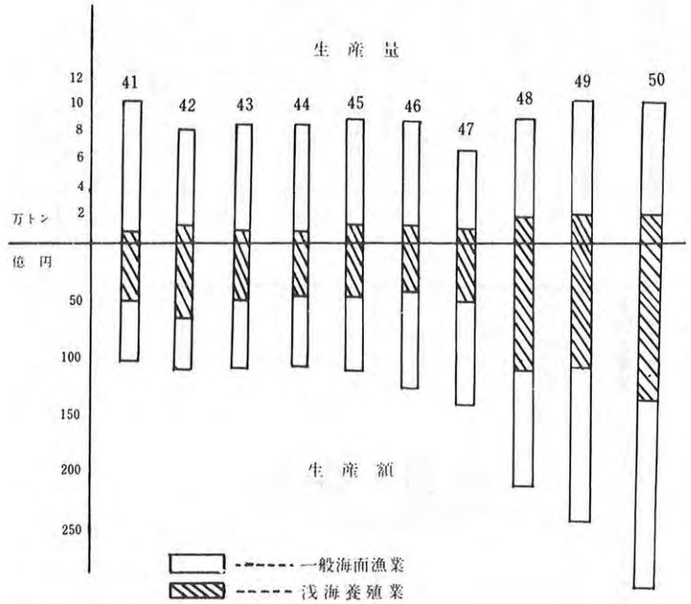
前年対比……21.5%増

生産量



前年対比……2.8%減

生産量・生産額の動き



昭和五十年における本県の漁業生産額は三百六億円（表参照）で前年より五十四億円（二一・五パーセント）の増加をみせており、なかでも海面養殖業は、百三十六億円（生産額の四四・五パーセント）で、二三・五パーセント増と、養殖業の伸びが目立っています。

生産量について、これを魚貝類別にみると、アサリ（四万千トン）が一位で、ついで、カタクチイワシ（六千百トン）、サバ類（四千八百トン）、マアジ（四千トン）、ハマグリ（二千七百トン）が上位を占め、これら五種で総漁獲量八万七千トンの六七パーセントを占めています。

また、本県の海面養殖業の収獲量・生産額は、自然、経済、需要等の各条件により増減がみられますが、総体的には増加傾向にあり、特にブリ（ハマチ）、タイ類、クルマエビ養殖は収獲量、生産額とも順調な伸びを示しています。

200カイリ時代の到来

本県の漁業経営体の九八・七パーセントが沿岸漁業であることは、現状のところで記したとおりですが、本県水産業の振興は、沿岸漁業の振興にあるといっても過言ではないと思われます。この沿岸漁業の振興については、国においても従来から沿岸漁業構造改善事業の実施などにより手が着けられていましたが、現在、新たな視点でいわゆる「沿岸見直し」の重要性が身近なものとして認識されてきました。それは「二百カイリ時代」の到来によってです。米ソ両国の二百カイリ宣言―実施は、北洋漁業に依存するところの大きい我が国に大きい衝撃を与え、結果的には、わが国のいわゆる海洋二法といわれる「領海法」、「漁業水域暫定措置法」が異例のスピードで成